

Annual Report of Innovation Center for Educational Resource 2013

九州大学附属図書館 付設教材開発センター年報 2013



教材開発センター年報 2013 目次

- 01 はじめに
- 02 メンバー
- 03 研究内容紹介
 - 04 藤村 直美 (芸術工学研究院 教授・総長特別補佐)
 - 08 岡田 義広 (教材開発センター 教授)
 - 12 吉田 素文 (医学研究院 教授・附属図書館副館長)
 - 18 井上 仁 (情報基盤研究開発センター 准教授)
 - 22 山田 政寛 (基幹教育院 准教授)
 - 26 高野 茂 (システム情報科学研究院 助教)
 - 30 麻生 典 (芸術工学研究院 助教)
- 35 部門紹介
 - 36 エデュケーショナルテクノロジー部門
 - 36 コンテンツデザイン部門
 - 36 オープンエデュケーショナルリソース部門
- 37 活動紹介
 - 38 講演会開催
 - イベント参加
 - 学会等の参加
- 43 プロジェクト紹介
 - 44 P&P (九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト)
「病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築」
- 47 講習会
- 53 資料
 - 54 教材開発センター組織
 - 54 組織図
 - 54 運営委員会
 - 55 撮影実績
 - 55 公開コンテンツリスト
 - 57 出版物
 - 57 ICER Newsletter
 - 57 Q&Aハンドブック

はじめに



教材開発センター長 藤村直美

2013年度は人員の増強が進み、専任の教員（教授）1名と事務職員（専門職員）1名に加えて、テクニカルスタッフ7名、事務補佐員2名という体制になりました。お陰さまで色々と活動の対象を広げることができました。授業の録画・公開に加えて、講習会にも力を入れ、Web学習システム、Handbook、著作権、電子教材開発者と対話型3Dコンテンツ開発者向けの講習会を多数実施しました。その後、教育企画委員会で、「教材開発センターが実施する講習会は全学FD活動の一環」と認めてもらったことで、講習会への参加者は増加傾向にあります。

教材を制作する時に著作権の取り扱いは頭が痛い問題です。講義室だけで閉じて使用する場合には例外規定もありますが、OCW、YouTube、iTunes Uなどを通じて外部にも公開できる教材を制作するには著作権問題の正しい理解と対応が必須です。そこで著作権を適切に扱うためのガイドブックを制作して配布し、好評を得ています^[1]。従来の授業の録画と公開、新しい教材開発などを含め、こうした様々な教材開発センターの活動が国内でも注目され、文部科学省Webサイトに教材開発センターの取り組みとして掲載されました^[2]。

一方、MITの宮川先生にお願いして、OCWとオープンエデュケーションに関する講演会を2013年7月に箱崎、伊都、大橋キャンパスを、遠隔会議システムで結んで実施しました。宮川先生には、2011年から始まったCourseraやedXなどのMOOCs (Massive Open Online Courses) の動向を分かりやすく紹介して頂き、大変参考になる講演でした。この中で、スタンフォード大学の人工知能 (AI) のMOOC講義は世界中から16万人の学習者が登録し、インタラクティブな機能を使い、宿題などを自動的に採点していることが紹介されました。こうした教育方法は今後の大学などの高等教育のあり方を根底から変革していく可能性を秘めているように思います。

2012年度から始まったMOOCsの活動は、海外だけでなく、日本においても活発になり、2013年10月にJMOOCが設立され、国内においても活動が始まりました^[3]。本学も設立会員としてJMOOCに参加しています。教材開発センターとしても高品質なビデオ教材を制作できる環境を整備し、学内の授業などで、反転授業などを比較的容易に実施できるように、2014年3月に大橋キャンパスにスタジオを整備しました。今後は、この設備を使って、学内でのビデオ教材の制作・利用促進、外部に対してはJMOOCやCourseraなどの世界のMOOCに講義を発信していけるようにしたいと考えています。

1. 吉田素文:大学教育における他人の著作物を含む電子・オンライン教材の作成と利用に関するQ&A、<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/recordID/1440766>
2. 文部科学省大学図書館における先進的な取り組みの実践例 (Web版) :http://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/___icsFiles/afieldfile/2013/11/14/1341380_04.pdf
3. JMOOC:<http://www.jmooc.jp/>

メンバー

Staff Members

2014年3月

センター長 Director

藤村 直美 (芸術工学研究院 教授・総長特別補佐)
Naomi Fujimura (Professor, Faculty of Design / Executive Adviser to the President)

教授 Professor

岡田 義広 (システム情報科学府担当教員)
Yoshihiro Okada (Professor, Graduate School of Information Science and Electrical Engineering)

協力教員 Collaborator

吉田 素文 (医学研究院 教授・附属図書館副館長)
Motofumi Yoshida (Professor, Faculty of Medical Sciences / Vice Director of Library)

井上 仁 (情報基盤研究開発センター 准教授)
Hitoshi Inoue (Associate Professor, Reserch Institute for Information Technology)

山田 政寛 (基幹教育院 准教授)
Masanori Yamada (Associate Professor, Faculty of Arts and Science)

高野 茂 (システム情報科学研究院 助教)
Shigeru Takano (Assistant Professor, Graduate School of Information Science and Electrical Engineering)

麻生 典 (芸術工学研究院 助教)
Tsukasa Aso (Assistant Professor, Faculty of Design)

研究内容紹介

Annual Report of
Innovation Center for
Educational Resource

2013

藤村 直美

(芸術工学研究院 教授・総長特別補佐・情報統括本部長・教材開発センター長)

→ 所属学会名

ACM, IEEE, 情報処理学会, 電子情報通信学会, 芸術工学会, アジアデジタルアートアンドデザイン学会 (ADADA)

→ 主な研究テーマ

- ・ 共同利用センターにおける管理・運営に関する研究
キーワード: 情報処理センター, 管理・運用, ネットワーク, コンピュータ
- ・ コンピュータとインターネットを活用した教育
キーワード: 遠隔教育, e-Learning, VOD
- ・ 視覚障害者支援システムの開発と実用化
キーワード: 視覚障害者, ネットワーク

→ 研究業績

- ・ 学会発表等
 1. Naomi Fujimura, Bring your own computers project in Kyushu university, Proc. of ACM SIGUCCS 2013, ACM, pp.43-50, Nov.7, 2013. <http://dl.acm.org/citation.cfm?id=2504789>
 2. Eisuke Ito, Yoshiaki Kasahara, Naomi Fujimura, Implementation and operation of the Kyushu university authentication system, Proc. of ACM SIGUCCS 2013, pp.137-142, Nov.7, 2013. <http://dl.acm.org/citation.cfm?id=2504788>
 3. Yoshiaki Kasahara, Eisuke Ito, Naomi Fujimura, Gulliver's Toss: Google's Chronic Big Load to University Mail Server and Its Sudden Resolution, Proc. of ACM SIGUCCS 2013, ACM, pp.169-174, Nov.7, 2013. <http://dl.acm.org/citation.cfm?id=2504815>
 4. 鷺頭史一, 藤村直美, Gamificationの体系化と導入法の提案, 日本デジタルゲーム学会 2013年度年次大会, 2014.03.

📄 研究内容

- ・ インターネットとコンピュータを活用した教育と技術移転
- ・ 共同利用のコンピュータセンターにおける管理・運用支援
- ・ 視覚障害者支援システムの構築

➔ 教育活動

・ 教育活動概要

教材の電子化, 出席情報の電子的な収集と提示, オンライン試験システムの導入など, OCW, WebCT, MOOC

・ 担当授業科目

1. 2013年度・前期, コアセミナー.
2. 2013年度・前期, 情報処理演習V.
3. 2013年度・前期, 芸術工学基礎演習.
4. 2013年度・前期, ネットワークサービス特論.
5. 2013年度・前期, 芸術情報プロジェクト演習.
6. 2013年度・後期, ネットワークサービスデザイン.
7. 2013年度・後期, Webコンテンツデザイン演習
8. 2013年度・後期, 芸術情報総合演習

➔ 大学運営

・ 学内運営に関わる各種委員・役職等

1. 2012.04~, 情報統括本部教育用無線LAN整備タスクフォース長.
2. 2012.04~, 情報統括本部学生PC必携化対応タスクフォース長.
3. 2012.04~2014.03, 芸術情報設計学科長.
4. 2011.04~, 附属図書館付設教材開発センター長
5. 2010.10~, 総長特別補佐
6. 2010.10~, 情報統括本部長
7. 2010.10~, 事務情報環境専門委員会副委員長.
8. 2010.10~, 全学情報環境利用委員会委員長.
9. 2009.06~, 教室系技術職員研修委員会委員長

研究内容詳細

■活動紹介

情報統括本部長および教材開発センター長として、九大の教育・学習環境の改善に取り組んでいます。以下に関連する活動例をいくつか紹介します。

- (1) まず特に大きな活動としては学生PC必携化があります。これは学部新生が自分で購入したPCを大学に持参して学習するもので、2013年度から始まりました。何時でも、何処でも、自分のペースで確実に学習できる環境の実現を目指したものです。これに伴って、これまで情報統括本部が整備していたPC部屋は順次廃止されていく予定です。
- (2) 学生PC必携化を円滑に進めるために、情報統括本部ではOffice系ソフトウェアやウイルス対策ソフトウェアを利用者の負担無しにインストールできる契約の実現、教育用無線LANやファイアウォールの整備等を行ないました。これに対応して、新学期の授業開始時に学習環境が揃っているように、4月最初に学生PC必携化のための講習会を行い、アカウントの活性化、無線LANの接続、ソフトウェアのインストールなどを一括して行なう活動を行なっています。

- (3) 学生PC必携化によって、実際の授業では、これまでログインに時間がかかる、処理が遅い、ファイルの保存領域が不十分であるという問題が解決されました。自分のPCを使いたがる学生が多く、PC部屋でも自分のPCを使っている姿が見られます。



- (4) 情報システムを利用する際にこれまでは学生IDを利用していましたが、学生IDが確定するのが3月31日であり、用途によっては間に合いません。そこで、Web学習システムによる入学前学習、学生PC必携化講習会や健康診断の円滑な実施などを目的として、学生用SSO-KIDを導入しました。これによって、これまでは学生IDの確定時期の制約のために実現できなかった様々なサービスを実現できるようになりました。学生用SSO-KIDは、在学中は不変であることから、学部卒業から大学院進学などの時に、メールアドレスが変わらない仕組みを実現できる、図書の貸し借りの手続きを不要にできるなど、各種サービスの利用開始時期の制約がなくなるだけでなく、様々な利点があります。

- (5) 2013年度は情報統括本部の各種サービスに使っているサーバ(認証、メール、ファイル共有システム等)や教育情報システムを更新しました。これに伴って、安定運用やサービスの質の改善を実現することができました。例えば、教職員ともにメールの保存容量を1GBにし、保存期間の制限を無くしました。ファイル共有システムでは、これまで保存容量が1GB、保存日数が90日でしたが、新しく保存容量10GB、保存期間に制約なしのシステムを新たに利用可能にしました。



<https://mail.m.kyushu-u.ac.jp>



<https://archive.iii.kyushu-u.ac.jp/>

- (6) 学生PC必携化が進むにつれて、通常の講義室においても授業中にPCを活用できるようになったことから、PCを活用した授業支援システムの実現に研究室レベルでは取り組んでいます。例えば、Windows 8のPCを使って、授業用の教材を教員と学生が共有し、学生は手元のPCで教材の上に書き込むことができる(メモ機能)、あるいは相互に質問をしたり、教えたり、情報共有を行なえる(コミュニケーション機能)アプリケーションを実現しています。これは使い勝手が良いことから、授業や会議を支援するシステムとして、2014年度中に商品化される予定になっています。

岡田 義広

(教材開発センター教授)

→ 所属学会名

米国電気電子工学会 (IEEE), 米国計算機学会 (ACM), 電子情報通信学会, 情報処理学会.

→ 主な研究テーマ

- ・ 3次元グラフィックス応用ソフトウェアに関する研究

キーワード: ソフトウェア部品化, 分散システム, ヒューマンインタフェース, コンピュータアニメーション

→ 研究業績

- ・ 原著論文

1. Ryo Sugimura, et al. : MOBILE GAME FOR LEARNING BACTERIOLOGY, in IADIS 10th Int. Conf. on Mobile Learning 2014, pp.285-289, February 28-March 2, 2014.
2. Umair Azfar Khan and Yoshihiro Okada: Character Generation using Interactive Genetic Algorithm, Proc. of the GameOn 2013, pp. 31-35, November 25-27, 2013.
3. Kosuke Kaneko and Yoshihiro Okada: Action Unit-Based Linked Data for Facial Emotion Recognition, Proc. of the 2013 Int. Conf. on Active Media Technology (AMT'13), LNCS, ISBN 978-3-319-02749-4, pp. 211-220, October 29-31, 2013.
4. Ryuya Akase and Yoshihiro Okada: Automatic 3D Furniture Layout Based on Interactive Evolutionary Computation, Proc. of the 5th Int. Workshop on Virtual Environment and Network Oriented Applications (VENOA-2013) of CISIS-2013, IEEE CS Press, pp. 726-731, July, 3-5, 2013.
5. Kosuke Kaneko and Yoshihiro Okada: Building of Japanese Emotion Ontology from Knowledge on the Web for Realistic Interactive CG Characters, Proc. of the 5th Int. Workshop on Virtual Environment and Network Oriented Applications (VENOA-2013) of CISIS-2013, IEEE CS Press, pp. 735-740, July, 3-5, 2013.
6. Yoshihiro Okada: Web Version of IntelligentBox (WebIB) and Its Integration with Webble World, Webble Technology as Proc. of First Webble World Summit (WWS 2013), CCIS series 372, (ISSN 1865-0929, ISBN 978-3-642-38835-4), pp. 11-20, June 3-5, 2013.

- ・ 学会発表

1. 岡田義広: アカデミッククラウドの標準仕様～「コミュニティで紡ぐ次世代大学ICT環境としてのアカデミッククラウド」成果報告～, 大学等におけるクラウドサービス利用シンポジウム, March 31, 2014.

📄 研究内容

「3次元グラフィックス応用ソフトウェアに関する研究」

ソフトウェア部品の再利用性を高め、アプリケーションソフトウェアの開発コストを下げるためには、どのようなコンポーネントをどのようなフレームワークで結びつけばよいかというソフトウェアアーキテクチャーの研究を行っています。特に3次元CGアプリケーション開発支援のためのソフトウェアアーキテクチャーの研究を行っています。また、専門の知識のない人にも使える人にやさしいインタフェースをもつ計算機をつくりたいと考えています。ソフトウェアアーキテクチャーの側面から研究・開発を行っています。さらに、インターネットの普及により、時間や場所に制限されることなく、種々の情報を容易にやり取りできるようになりました。計算機により支援される種々の知的作業を複数の人で協調して行える環境をつくりたいと考えています。ソフトウェアアーキテクチャーの側面から研究・開発を行っています。

最近では、ビデオゲームの開発支援環境やデジタルTVのデータ放送コンテンツ開発、教育用コンテンツ開発、および博物館におけるデータ提示技術に関する研究開発を行っています。

2. 赤瀬龍也, 岡田義広: 対話型進化計算に基づく3次元シーン生成システムとそのユーザ評価, 第76回情報処理学会全国大会講演論文集, March 12, 2014.
3. 岡田義広: アカデミッククラウドの標準仕様と学認, 「アカデミッククラウドを支える学認」[学認シンポジウム], JAPAN IDENTITY & CLOUD SUMMIT, January 14-15, 2014.
4. 岡田義広: e-Learning開発と国際化, 大連大学主催「中・日・韓日本語文化研究国際フォーラム」, September 21-22, 2013.
5. 岡田義広: アカデミッククラウド構築に係るシステム研究—コミュニティで紡ぐ次世代大学ICT環境としてのアカデミッククラウド—, 「アカデミッククラウドシンポジウム2013」[クラウドウィーク2013], September 3-5, 2013.

➔ 研究資金

・ 科学研究費補助金

1. 2011年度～2013年度, 基盤研究 (C), 代表, 具象化に基づく3次元CGコンテンツの自動生成と対話型進化計算を用いた最適化の研究.

・ 学内資金・基金

1. 2012年度～2013年度, 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト, 分担, リハビリ支援ゲームの開発評価拠点構築のための先行研究.
2. 2012年度～2013年度, 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト, 分担, 病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築.

➔ 教育活動

・ 担当授業科目

1. 2013年度・前期・集中, 文学部: 「博物館情報・メディア論」(分担)
2. 2013年度・前期, 全学教育[G30]: 「Basic of Information Processing」
3. 2013年度・後期, 大学院システム情報科学府: 「3次元コンピュータグラフィックス論」
4. 2013年度・後期, 理学部物理学科情報理学コース: 「マルチメディア情報処理」, 「画像解析」

➔ 大学運営

・ 学内運営に関わる各種委員・役職等

1. 2013.04～, 附属図書館研究開発室・室員
2. 2013.04～, 教育改革企画支援室・室員
3. 2012.06～, 基幹教育実施WG・理系班・情報科学専門チーム・委員

■代表的な研究業績とその内容

著者は、3次元CG応用ソフトウェアに関する研究開発を1993年から行っており、1995年に北海道大学の田中譲教授とともにインテリジェントボックス (*IntelligentBox*) とよぶ3次元CG応用ソフトウェア開発支援システムを提

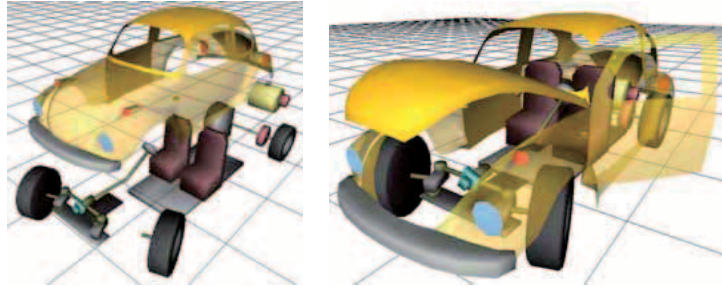


図1: インテリジェントボックスの画面イメージ

案した。図1左に示すように、インテリジェントボックスは、ボックスとよぶ多面体の形状と固有の機能を持つ3次元オブジェクトを提供する。図1右に示すように、このボックスを画面上で互いに親子関係を与え組み合わせ機能合成することにより、合成された機能を持つ合成ボックスを構築できる。この構築過程が3次元CG応用ソフトウェアの開発過程となる。3次元CG応用ソフトウェアを開発する上で有用となる種々の機能部品が現在までに多数開発されている。インテリジェントボックスは*MagicCube+*という名称です

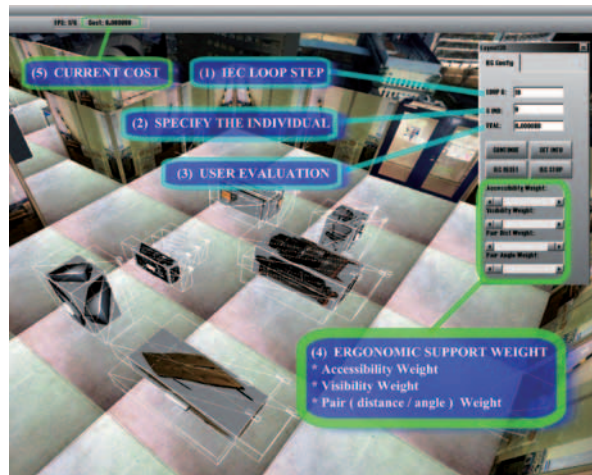


図2: 対話型進化計算を用いたインテリア・レイアウトシステムの画面

に2001年に製品化されている。2002年11月～2006年3月には、インテリジェントボックスを発展させた動的プログラミング環境の研究を科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業・さがけ研究「協調と制御」領域において「実世界指向の具象化プログラミング」というテーマで実施した。高度に没入感のあるインタラクションを目指した仮想世界-実世界間プログラミング環境の研究である。現在は、インテリジェントボックスを基盤として用いた種々の応用研究を行っている。例えば、科学研究費補助金「具象化に基づく3次元CGコンテンツの自動生成と対話型進化計算を用いた最適化の研究」の課題を実施した。図2に示すのは、対話型進化計算を用いたインテリアのレイアウトシステムの画面である。

■その他の研究と従事しているプロジェクト等

図3に示すのは、2004年に提案したTime-tunnelとよぶ3次元CGを用いた時系列および多次元データの動的可視化解析ツールを拡張したParallel Coordinates版*Time-tunnel*の画面イメージである。現在著者は、財団法人九州先端科学技術研究所 (ISIT) の特別研究員を兼務しており、**総務省「国際連携によるサイバー攻撃予知・即応プロジェクト『PRACTICE』」**に参画している。このプロジェクトでは、Parallel Coordinates版*Time-tunnel*の機能を拡張した*2Dto2D Visualization*と

よぶ機能を使ってネットワークトラフィックデータの可視化解析を行っている。また、**文部科学省「社会システム・サービス最適化のためのサイバーフィジカルIT統合基盤の研究」**に九州大学側メンバーの一人として参画しており、Parallel Coordinates版 *Time-tunnel* やインテリジェントボックスを用いて、多種多様な実世界のセンシングデータを可視化解析することにより安全・安心で高効率な社会活動を誘導する仕組みについて研究を実施している。

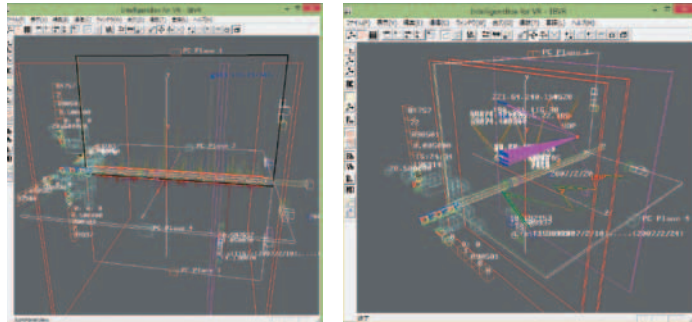


図3: Parallel Coordinates版 *Time-tunnel* の画面

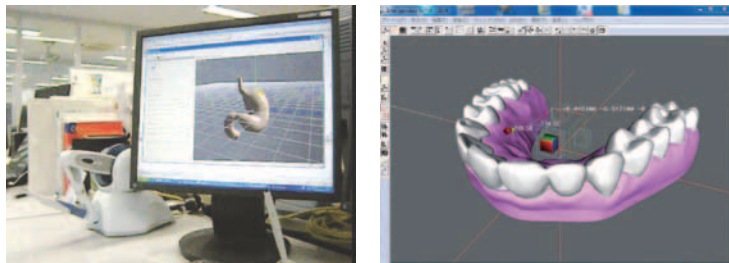


図4: 手術トレーニングシステム (左) と
歯科治療トレーニングシステム (右) の画面イメージ

著者は、2011年4月から附属図書館付設教材開発センターの協力教員となり、2013年1月から専任教授を務めている。コンテンツデザイン部門に所属し、3次元CGを用いた双方向型電子教材開発のための講習会や電子教材開発支援システムの研究開発を実施している。研究プロジェクトとしては、2012年度のP&Pに採択された課題「**病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築**」(代表: 吉田素文・医学研究院教授、教材開発センター協力教員)の研究開発に分担者として参画している。2012年度には、3次元CGを用いて対話型のウェブコンテンツとして骨学教材を医学部学生・システム情報科学府学生と協働で開発した。2013年度には、細菌学を学習するためのシリアスゲームの開発を学生と協働で行った。その成果は、2014年2月28～3月2日に開催された **Mobile Learning 2014** 国際会議にて発表した。また、教材開発に関する研究として、力覚が得られるデバイス (Phantom) を用いた種々のトレーニングシステムの研究開発を行っている。図4に示すのは、著者の研究室で開発した手術トレーニングシステム (左図) と歯科治療トレーニングシステム (右図) の画面イメージである。

2013年度の新規プロジェクトとして、九州大学が中核機関として文部科学省から委託を受けた～**アカデミッククラウド環境構築に係るシステム研究～「コミュニティで紡ぐ次世代大学ICT環境としてのアカデミッククラウド」**事業がある。著者は本事業の事業代表者を務めた。本事業に係わる情報・資料等は、<http://www.icer.kyushu-u.ac.jp/ac>から参照可能である。

■研究室のホームページ

<http://goemon.i.kyushu-u.ac.jp/OkadaLab/>

■発表論文リストのページ

<http://goemon.i.kyushu-u.ac.jp/OkadaLab/modules/okadalab/publication.php>

吉田 素文

(医学研究院 教授・附属図書館副館長)

→ 所属学会名

日本外科学会、日本医学教育学会、日本図書館情報学会

→ 主な研究テーマ

- ・ 模擬患者の養成法
キーワード: 模擬患者, 養成
- ・ 臨床実習前あるいは臨床実習後, 卒後研修におけるOSCEの開発と評価
キーワード: OSCE, 臨床実習前, 臨床実習後, 卒後研修
- ・ 臨床実習中の医学生の医療面接体験と効果的な学習法に関する研究
キーワード: 臨床実習, 医療面接, 医学生
- ・ 入院体験実習の評価
キーワード: 入院体験, 態度教育

→ 研究業績

- ・ 学会発表
 1. Makoto Kikukawa, Ito Kozue, Kikuko Taketomi, Akihiro Yakaoka, Motofumi Yoshida, Medical Students' Perceptions of the Purposes of Medical Interviews, Poster Presentation, 11th Asia Pacific Medical Education conference (APMEC) , 2014.01.
 2. 吉田 素文 (九州大学 医学教育学), 菊川 誠, 中西 洋一, 臨床推論に関するカリキュラム改編と共用試験CBT成績との関連性, 第45回日本医学教育学会, 2013.07.
 3. 菊川 誠, 小田 康友, 谷口 純一, 藤崎 和彦, 吉田 素文, 模擬患者と共に開発する医療コミュニケーション学習の方向性 (第3報), 伊東 こずえ (九州大学医療系統合教育研究センター), 第45回日本医学教育学会, 2013.07.
 4. 貝沼 茂三郎 (九州大学 大学院医学研究院地域医療教育ユニット), 永田 雅治, 菊川 誠, 吉田 素文, 九州大学医学部学生の地域医療に関する意識調査, 第45回日本医学教育学会, 2013.07.
 5. 貝沼 茂三郎, 菊川 誠, 吉田 素文, 実習施設別にみた地域医療に関する医学生の意識について

📄 研究内容

研究活動分野：基本的臨床技能の教育に関する研究、客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination; OSCE)に関する研究、医療面接の教育に関する研究、模擬患者の養成に関する研究、医療系統合教育に関する研究、多職種連携教育に関する研究、医療系教育へのWBT(Web Based Training)の応用に関する研究、学習資源の開発と流通に関する研究、情報専門職の教育に関する研究

教育活動分野：基本的臨床技能、OSCE、医療面接、模擬患者養成、医療系統合教育、多職種連携教育、医療系教育へのWBTの応用、学習資源の倫理、情報専門職のコミュニケーション教育、基幹教育

社会活動分野：医学教育に関するFaculty Developmentでの講演、電子教材に含まれる他人の著作物の取扱いに関する教職員研修

九州大学医学部における地域医療教育, 永田 雅治 (九州大学 大学院医学研究院地域医療教育ユニット), 第45回日本医学教育学会, 2013.07.

6. 武富 貴久子 (九州大学), 菊川 誠, 大滝 純司, 吉田 素文, クリニカルクラークシップにおける学生の学習経験の特定とプログラム評価に関する文献検討, 第45回日本医学教育学会, 2013.07.

7. 菊川 誠 (九州大学 大学院医学研究院医学教育学部門), 伊東 こずえ, 武富 貴久子, 松本 尚子, 山岡 章浩, 吉田 素文, 医学生は医療面接の意義・目的をどのように認識しているのか?, 第45回日本医学教育学会, 2013.07.

・ シンポジウム

1. 「医療系統合教育研究センターのこれまでの経緯と今後の展望」, 九州大学医療系統合教育研究センター 10周年記念式典・シンポジウム, 2014.01, 九州大学

・ 特別講演

1. 第91回日本生理学会大会教育プログラムモデル講義モデレーター, 2014.03.

2. 「e-learning教材における著作権」, がんプロ関連特別講演会, 2014.02.

3. 「九州大学病院 全人的医療人育成教育プログラム (臨床指導者コース) ワークショップ」ファシリテータ, 2014.01.

4. 「臨床倫理の考え方」, 福岡県医師会自浄作用活性化研修会「ハートフル研修会」, 2013.12.

5. 「九州大学附属図書館付設教材開発センター活動内容紹介～電子教材開発と知の公共化に関する取組について」, アカデミック・リンク・セミナー, 2013.12.

6. 「医学・医療系の電子教材作成支援活動における課題と対策～他人の著作物を含む電子教材の作成支援における大学図書館の役割」, 第20回医学図書館研究会・継続教育コース, 2013.11.

7. 「評価方法について」, 平成25年度共用試験医学系OSCE評価者認定講習会, 2013.09.14. (名古屋市立大学), 2013.09.28. (帝京大学), 2013.10.06. (東京女子医科大学), 2013.10.27. (東京慈恵会医科大学)

8. 「2014年度共用試験医学系OSCE実施要綱について」, 平成25年度共用試験医学系OSCE全国説明会, 2013.09.

9. 「実践力をつける教育のあり方～医学教育の経験から」, 全国保健師教育機関協議会九州ブロック研修会, 2013.08.

→ 研究資金

・ 科学研究費補助金

1. 2013年度～, 自己主導型学習能力獲得のための、医学部6年一貫したモデルカリキュラム開発研究

・ 学内資金・基金

1. 2012年度～2013年度, 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト, 「病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築」
2. 2013年度, 九州大学基金助成事業 [教材・ソフトウェア等開発、コンテンツ整備等支援], 「人体の微細構造を可視化し、学習する3次元ハンズオン組織モデルの作成」
3. 2013年度～, 教育の質向上支援プログラム「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」
4. 2013年度～, 教育の質向上支援プログラム「医療者プロフェッショナリズム教育の構築」

→ 教育活動

・ 担当授業科目

1. 2013年度・前期, コアセミナー.
2. 2013年度・前期, 医学入門.
3. 2013年度・前期, 初年次総合科目「医学教育・研究発表技法」.
4. 2013年度・前期, 統合教育科目「インフォームドコンセント」.
5. 2013年度・前期, 総合医学「医療コミュニケーション入門」.
6. 2013年度・前期, LSS「コミュニケーション論」.
7. 2013年度・後期, 臨床医学基本実習.
8. 2013年度・後期, 統合教育科目「臨床倫理」.
9. 2013年度・後期, 総合医学「臨床推論演習」.
10. 2013年度・後期, 「医学研究特論Ⅰ」.
11. 2013年度・通年, 臨床医学実習「医療面接」.

 **大学運営****・学内運営に関わる各種委員・役職等**

1. 2008.10～, 附属図書館副館長.
2. 2006.09～, 教育改革企画支援室員.
3. 2004.04～, 医療系統合教育研究センター委員会委員.
4. 2004.04～, 学生生活・修学相談員.
5. 2004.04～, 大学院医学研究院医学教育学部門医学教育学講座教授.
6. 2004.04～, 医療系統合教育研究センター業務主任.
7. 2004.04～, 共用試験実施委員会委員長.

- ・ 附属図書館付設教材開発センター (<http://www.icer.kyushu-u.ac.jp/members>)
オープンエデュケーションリソース部門の協力教員として、電子教材に含まれる他人の著作物の取扱いに関するFDと学生教育などに従事した。



電子教材における著作権についての資料等を掲載した教材開発センターのウェブサイト
(http://www.icer.kyushu-u.ac.jp/copyright_info/)

- ・ 大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻 (http://lss.ifs.kyushu-u.ac.jp/?page_id=235)
学生指導のほか、コミュニケーション論の授業を担当した。
- ・ 高等教育機構教育改革企画支援室 (<http://www.kyushu-u.ac.jp/education/er/member.html>)
室員として、GPAに関する検討に従事した。

■学外でのアクティビティ

- ・ 公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構 (http://www.cato.umin.jp/01/0207iinkai_list_6.html)
医学系OSCEについて、実施小委員会副委員長をはじめ、2つの小委員会と4つの部会の委員として運営に従事した。
- ・ 日本医学教育学会 (<http://jsme.umin.ac.jp/>)
医学教育専門家制度委員会医学教育専門家制度WG、国家試験・共用試験委員会、教材開発・SP委員会、地域医療・多職種連携教育委員会で、検討および資料作成等に従事した。
- ・ 厚生労働省医師国家試験委員として試験問題の作成に従事した。

井上 仁

(情報基盤研究開発センター 准教授)

→ 所属学会名

Association for the Advancement of Computing in Education, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本教育工学会, 教育システム情報学会.

→ 主な研究テーマ

- ・ 情報通信技術を利用した教育支援のための研究と開発
キーワード: eラーニング, 教育の情報化
- ・ 昆虫学データベースの構築
キーワード: テキストデータベース

→ 研究業績

- ・ 学会発表等
 1. 井上仁, 九州大学における次期教育情報システムの概要と将来構想, 大学ICT推進協議会平成25年度年次大会, 2013.12.
 2. 多川孝央, 山川修, 安武公一, 隅谷孝洋, 井上仁, 複数のデータに基づく多面的な学習履歴情報分析について, 日本教育工学会第29回全国大会, 2013.09.
 3. 吉川由香里, 中畑高子, 井上仁, 新人看護教育におけるインタラクティブ教材の学習効果の比較評価, 日本教育工学会第29回全国大会, 2013.09.
 4. 井上仁, 益田健, 藤村直美, オープンコースウェアとシラバスシステムとの連携, 教育システム情報学会第38回全国大会講演論文集, pp69-70, 2013.09.
 5. 井上仁, 藤村直美, 九州大学におけるOCW, YouTube, iTunes U の現状と展望, 日本工学教育協会第61回年次大会, 2013.08.

📄 研究内容

・ 情報通信技術を利用した教育学習支援のための研究と開発

近年、eラーニングを始めとする情報通信技術を利用した教育が組織的に実施されている。その成功のためには、教育の実施部局と学内の教育に関わる組織との連携と協力が必要である。そこで、教育工学の立場から、教育・学習を支援するための研究と開発を行なっている。具体的には、教材作成支援環境、ログ情報の分析に基づく知的利用支援環境、教育用計算機の知的運用管理、アクティブラーニングのための学習空間に関する研究と開発を行なっている。

・ 昆虫学データベースの構築

文献の蓄積・検索、論文の作成、自然言語の解析等、研究者の日常的な活動を支援する目的で、旧大型計算機センターで公開していたテキストデータベース管理システム「SIGMA」の開発に携わってきた。このSIGMA上の公用データベースとして、昆虫学データベースがある。より使いやすいユーザインタフェースの要求や、インターネットの普及に伴い、当センター以外からもデータベースを利用したいという要求が高まってきた。このような背景から、SIGMAの検索機能をWebサーバに組み込んだ昆虫学データベースシステムを開発し公開しており (<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/>)、その検索機能等の研究開発を行なっている。

➔ 研究資金

・ 科学研究費補助金

1. 2012年度～2014年度, 基盤研究 (C), 分担, 学習に寄与するLMSログ可視化の研究.
2. 2011年度～2013年度, 基盤研究 (C), 分担, 学習コミュニティのソーシャル・キャピタルに関する実証的研究.

➔ 教育活動

・ 担当授業科目

1. 2013年度・前期, プレゼンテーション演習.
2. 2013年度・前期, ライブラリーサイエンス特論.
3. 2013年度・前期, 情報システム論.
4. 2013年度・後期, 少人数セミナー「スマートフォン・タブレット端末用アプリの開発」.
5. 2013年度・後期, 電子資料開発論.
6. 2013年度・後期, ライブラリーサイエンス PTL I.
7. 2013年度・通年, ライブラリーサイエンス特別研究.
8. 2013年度・通年, 特別研究II.
9. 2013年度・通年, 特別研究I.

➔ 大学運営

・ 学内運営に関わる各種委員・役職等

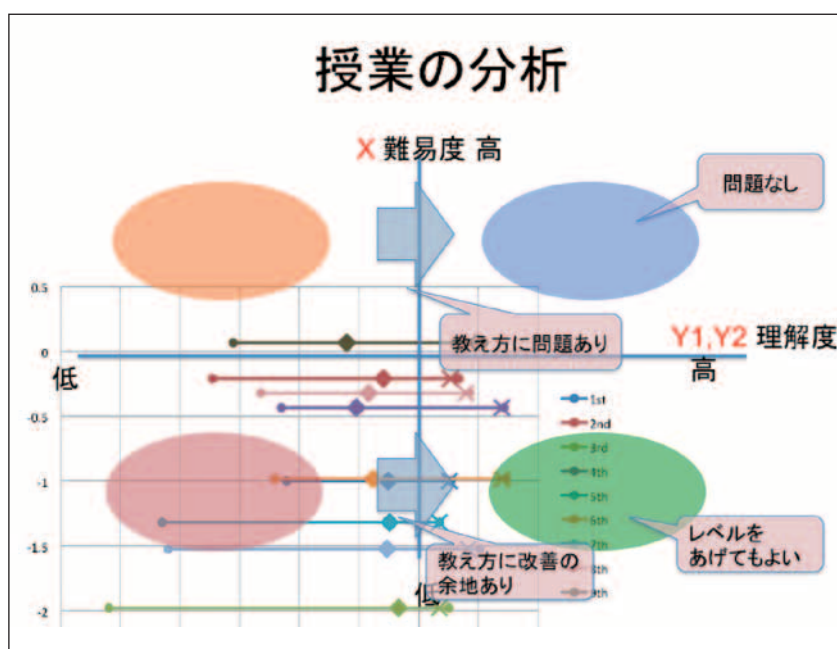
1. 2010.04～情報統括本部 教育支援事業室 室長

■情報通信技術を利用した教育学習支援のための研究と開発

近年、eラーニングを始めとする情報通信技術を利用した教育が組織的に実施されている。その成功のためには、教育の実施部局と学内の教育に関わる組織との連携と協力が必要である。そこで、教育工学の立場から、教育・学習を支援するための研究と開発を行なっている。具体的には、教材作成支援環境、ログ情報の分析に基づく知的利用支援環境、教育用計算機の知的運用管理、アクティブラーニングのための学習空間に関する研究と開発を行なっている。

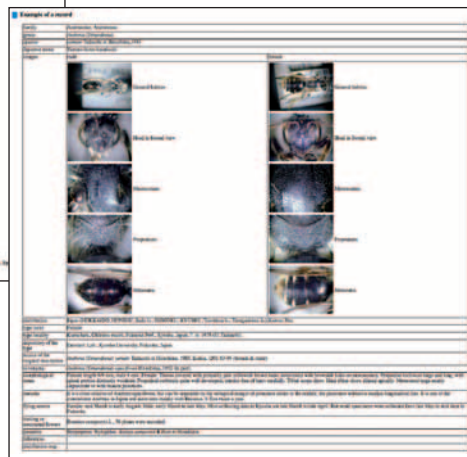
コース管理システム(CMS)上で実施されるオンラインの成績履歴データを元に、オンラインテストの難易度を測定し、またその結果を元に学生の能力を測定することにより、授業を客観的に評価する手法を構築している。具体的には、授業内容の難易度、授業直後の理解度、復習後の理解度の三つの指標を定義し授業を分析している。これらの指標の算出には、項目応答理論(IRT)を利用して、授業担当者、所属機関、対象分野、授業形態等に依存しない統一的な指標の元で授業を評価する方法を提案した。

また本学の大学病院看護部では、静脈注射認定看護師を養成するために、知識の獲得や実技実習の後、知識と実技に関する認定試験を実施している。知識獲得に関しては、現在筆記試験により評価しているが、模擬試験としてCMS上でオンラインテストを実施している。これまで、模擬テストに対する評価はまったく実施していなかったが、CMSの成績履歴を元にIRTで各質問の難易度や識別率を測定し、テストの改善を実施した。



■昆虫学データベースの構築

文献の蓄積・検索，論文の作成，自然言語の解析等，研究者の日常的な活動を支援する目的で，旧大型計算機センターで公開していたテキストデータベース管理システム「SIGMA」の開発に携わってきた。このSIGMA上の公用データベースとして，昆虫学データベースがある。より使いやすいユーザインタフェースの要求や，インターネットの普及に伴い，当センター以外からもデータベースを利用したいという要求が高まってきた。このような背景から，SIGMAの検索機能をWebサーバに組み込んだ昆虫学データベースシステムを開発し公開しており(<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/>)，その検索機能等の研究開発を行なっている。



山田 政寛

(基幹教育院 准教授)

→ 所属学会名

日本教育工学会, 教育システム情報学会, IEEE, ICLS, 情報処理学会等

→ 主な研究テーマ

- ・ 「探求の共同体 (Community of Inquiry)」に基づいたCSCLデザインと評価に関する研究
- ・ オンライン協調的学習環境における学習コミュニティ形成プロセスに関する研究
- ・ 教室外におけるアクティブラーニング支援環境のデザイン、開発、評価に関する研究
- ・ 学びの場としての大学図書館の再構築、ラーニングコモンズデザインと効果測定に関する研究

キーワード: コンピューター支援による協調学習、学習環境デザイン、ソーシャルメディア、教育・学習におけるICT活用

→ 研究業績

- ・ 原著論文ならびに国際会議
 1. Yamada, M., Goda, Y., Matsukawa, H., Hata, K., Yasunami, S., C4 (C quad) : Development of the Application for Language Learning Based on Social and Cognitive Presences, EuroCALL 2013, 258-264, 2013.12.
 2. 山田政寛, インフォーマルラーニングにおけるICT利用に関する研究動向, 日本教育工学会論文誌, 37, 3, 197-209, 2013.11.
 3. Goda, Y., Yamada, M., Matsuda, T., Kato, H., Saito, Y., Miyagawa, H., Effects of Help Seeking Target Types on Completion Rate and Satisfaction in E-Learning, 7th International Technology, Education and Development Conference, 1399-1403, 2013.03.
- ・ 学会発表等
 1. 山田政寛, これからの人材育成における大学図書館の役割: 学習支援を中心に, 第99回全国図書館大会 福岡大会, 第2分科会「図書館の学修支援を考える」, 2013.11.
 2. 山田政寛, 新たな学びの空間 ラーニングコモンズ, 関西学院大学 アカデミックコモンズシンポジウム&高等教育推進センター第4回FD講演会「アカデミックコモンズから始まる学びの再発見」, 2013.10.
 3. 山田政寛, 大学を取り巻く状況と大学図書館の役割, 平成25年度大学図書館職員短期研修, 2013.10.
 4. 山田政寛, 能動的な学習を支援する大学図書館の挑戦, 九州工業大学MILAiSフォーラム「次

📄 研究内容

(1) ソーシャルソフトウェアを活用した協調学習のデザインと評価に関する研究と実践

協調的なアクティブラーニングを授業で進めるためには、授業外の学習支援環境が重要となる。そのため、ソーシャルソフトウェアを活用し、人間関係、認知的学習、学習ガイドラインが提示されるコミュニティのデザインを行い、授業の評価を行っている。

(2) 大学図書館を中心とした学習支援環境デザインに関する研究と実践

平成26年度からスタートする基幹教育を授業外で学習支援するために、大学図書館を中心にその支援策を検討している。学習支援を実施するには、大学図書館員の企画力も重要ではあるが、教育・学習に関する理解、セミナー等の設計法なども知る必要が指摘されている。大学図書館を中心に基幹教育や他部局の教育・学習に貢献できる支援策について検討し、研究・実践を行っている。

代の学びを実現する：能動的な学習を促す環境デザイン」, 2013.09.

5. 山田政寛, 協調的なアクティブラーニングを取り入れた授業デザイン～学習行動、学習空間、学習ツールの観点から～, 長崎大学平成25年度教育革新シンポジウム, 2013.08.
6. 山田政寛, ラーニングコモンズにおける学習支援～フォーマル・インフォーマルラーニングの観点から～, 関西学院大学アカデミックコモンズオープン記念シンポジウム「新たな学びの空間が拓く世界～「気づき・出会い」が生み出す知の活性化」, 2013.07.

➔ 研究資金

・ 科学研究費補助金

1. 2013年度～2015年度, 若手研究 (A), 代表, 「探求の共同体」の再構成によるデザインに基づいたPBL支援システムの開発と評価.
2. 2012年度～2014年度, 基盤研究 (B), 分担, 自己調整学習スキル習得、および学習支援の負荷軽減を目指す支援システムの開発・評価.
3. 2011年度～2013年度, 基盤研究 (C), 分担, 講義型授業における協調学習設計一論証作成CSCL開発と脳波位相同期による評価.
4. 2011年度～2013年度, 基盤研究 (B), 分担, 学習スタイルと援助行動に基づいた授業外外国語学習支援環境の構築と評価.

➔ 教育活動

・ 担当授業科目

1. 2013年度・前期, 教育情報工学.
2. 2013年度・後期, 学習科学.
3. 2013年度・後期, 課題協学: 安心な地球環境を求めて.
4. 2013年度・後期, メディア教育論演習.

➔ 大学運営

・ 学内運営に関わる各種委員・役職等

- 2013.10～, 九州地区大学一般教育協議会運営委員会.
- 2013.04～, 教育学部情報システム委員会 委員.
- 2013.04～, 大学評価専門委員会 委員.
- 2013.04～, 教育改革企画支援室 室員.

(1) ソーシャルソフトウェアを活用した協調学習のデザインと評価に関する研究と実践

授業外Facebookを利用した協調学習を導入した、2年間の授業実践について、2012年度受講生による学習コミュニティの状態受容に関する分析結果を報告する。具体的には協調学習を導入した2つの授業にてFacebookを授業外学習支援のために利用し、「探求の共同体」尺度を用いて、量的な主観的評価を行ったところ、学習コミュニティの状態が認知面・教授面で高く評価された。社会的存在感に関する学習者の行動が、授業が進むにつれて、どう変わっていったのか時間的変化について質問紙により検討を行った。結果として、授業の最初の段階ではFBと対面の両方において自己紹介などの自己開示が行われ、中盤・後半においてはLINEやTwitterでグループを作ること、また議論中に反論するといったことも行うことも示された。

また、学習管理システムである“Moodle”向けの協調学習モジュール“C4”の開発を行い、「探求の共同体」の観点から、分析を行っている。C4はチャットだけではなく、チャット内の発言をコンセプトマップ内へドラッグ&ドロップで移動でき、コンセプトマップの1オブジェクトとして扱うことができる機能、協調学習前のレディネス向上のためのチャットボット、同じグループのメンバーのログイン頻度や発言の貢献度状況を可視化することができる。「探求の共同体」の観点で評価を行ったところ、チャットボットで学習することで、チャット中の人間関係形成に関係する発言が増加し、それが議論への発展を促し、より人間関係が深まる感覚になることが示された。このモジュールは今後、著者のサイト“<http://mark-lab.net>”などで商用目的以外において無償公開する予定である。

(2) 大学図書館を中心とした学習支援環境デザインに関する研究と実践

平成26年度より、基幹教育が始まり、1年生については、基幹教育セミナー以外は5限授業がなくなる。それは基幹教育で提供される授業に向けた予習・復習をしっかりと行ってもらうことを想定したことであり、まさに授業外学習支援が必要となる。平成25年度では基幹教育の中でも、全員必修となる協調学習スタイルの授業である、課題協学と連動した学習支援について試行し、評価を行った。具体的には、「課題協学：安心な地球環境を求めて」の「環境教育」（全4回）で試行され、授業の具体的な流れ、課題名、課題図書など授業運営に関する情報についてパスファインダーである“Cute.Guides”で紹介する旨を説明した。なお、パスファインダーへのアクセスは強制していない。授業形態と流れについて表で示す。また課題図書については図書館で所蔵していないものについては購入してもらい、授業用に貸出カウンターで置き置き処理がなされた。

回	授業スタイル	課題
1	講義型+議論	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境教育の事例（国内外）、環境保護に関わる心理、ゲーム型教材の事例と評価、導入に必要なこと、それぞれについて記述されている文献（4つ）を分担し、読み、内容を整理してくる ・ ゲーム教材のデザインを考えてくる
2	体験型	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲームの開発に関係する書籍で重要となる4つの章を分担し、それぞれ中身を整理してくる ・ ゲーム教材のデザインを考えてくる
3	議論	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲーム教材のデザインを考えてくる ・ 発表用のスライドを作成してくる
4	発表	<ul style="list-style-type: none"> ・ 回分の授業の中で重要と考えるキーワードの説明 ・ 効果的だと考える環境教育とはどういうものか ・ 自分は将来、環境教育にどう関われるか

パスファインダーの効果を5段階評価（1：ネガティブー5：ポジティブ）の質問紙で評価を行ったところ、概ね、3.5ポイント付近であり、パスファインダーの主観的效果がポジティブに受け入れられた。具体的には「シラバスよりも詳細に書かれており、授業で何を実際にするのか、理解できた、準備ができた」といった意見があった。一方で、より発展的に自分で関連情報を調べてみるといった行動には結びつかなかった。課題図書へのアクセスも評価が高く、平成26年度実施に向けた学習支援の指針を得ることができた。

高野 茂

(システム情報科学研究院 助教)

→ 所属学会名

情報処理学会, 人工知能学会, IEEE.

→ 主な研究テーマ

- ・ リフティング複素ウェーブレットに基づくモバイル図鑑検索システムの構築
キーワード: 画像検索, リフティング複素ウェーブレット変換
- ・ モバイル端末のための電子図鑑システムの構築
キーワード: 画像認識, 電子図鑑
- ・ リフティング類似Haarウェーブレット変換による高速物体認識システムの開発
キーワード: リフティングウェーブレット, 類似Haarフィルタ, 物体検出

→ 研究業績

- ・ 原著論文
 1. Shigeru Takano, Ilya Loshchilov, David Meunier, Michele Sebag, Einoshin Suzuki, Fast Adaptive Object Detection towards a Smart Environment by Mobile Robots, Proc. Fourth International Joint Conference on Ambient Intelligence (Aml 2013), Volume 8309, 182-197, 2013.12.
 2. Shigeru Takano, Design of lifting wavelet filters for local feature analysis of an image, Proc. IIAI International Conference on Advanced Information Technologies, 2013.11.
 3. MISAKO MISHIMA, Takashi MATSUMOTO, Shigeru Takano, Osamu Matsuda, KOKOPIN App: A mobile platform for biogeography, MAED '13 Proceedings of the 2nd ACM International Workshop on Multimedia Ecological Data, in conjunction with ACM MULTIMEDIA 2013, 35-40, 2013.10.
- ・ 学会発表等
 1. 安部弘通, 高野茂, 馬場謙介, 村上和彰, 簡易脳波センサを用いた行動認識に関する研究, 情報処理学会九州支部火の国シンポジウム2014, 2014.03.
 2. 神園卓也, 高野茂, 馬場謙介, 村上和彰, 深度情報を含む映像からの行動認識に関する研究, 情報処理学会九州支部火の国シンポジウム2014, 2014.03.
 3. 野寄朋彦, 馬場尚美, 高野茂, 中井俊文, 石田浩二, 安浦寛人, 九州大学全学共通ICカードの導入・サービス運用事例, 大学ICT推進協議会2013年度年次大会, 2013.12.

📄 研究内容

画像からその「特徴」を抽出することは、画像・動画の物体検出・追跡・認識および類似画像検索などのシステムを構築する際に必要不可欠な技術要素である。特に画像内容に基づく「一般物体認識」の技術が確立できれば、コンピュータビジョンの研究分野は飛躍的に発展すると考えられる。本研究では、環境適応的に画像から効率よく特徴を抽出するために、下記3つのサブテーマの研究を遂行した。

- (1) リフティング複素ウェーブレット理論を開発する。これにより画像の特徴点であるキーポイントを既存手法と比較して高速に検出できることを実験により示す。またリフティング複素ウェーブレットフィルタに基づく画像の客観的な特徴を抽出するSIFT特徴抽出アルゴリズムを考案する。
- (2) 信号のバンドパス成分を抽出することのできるリフティングウェーブレットフィルタを設計し、マルチバンドパスフィルタの組を構成する。これにより、窓フーリエ変換に基づく信号の周波数解析と同等以上の解析をウェーブレット変換により実施することが可能となる。
- (3) LCWTに基づく環境に適応する物体認識アルゴリズムを考案し、モバイルロボットに実装する。具体的には、物体認識の精度が向上するように遺伝的アルゴリズムに基づくリフティングウェーブレットフィルタを学習する手法を構築し、モバイルロボットを用いた実験を行う。

➔ 研究資金

- ・ 科学研究費補助金
 1. 2011年度～2013年度, 基盤研究 (C), 代表, リフティング複素ウェーブレットに基づくモバイル図鑑検索システムの構築.
- ・ 学内資金・基金
 1. 2013年度～2013年度, 分担, 病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築.

➔ 教育活動

- ・ 教育活動概要

理学部物理学科情報理学コースの学生に対して以下の3つの演習を担当する。

 - プログラミング演習 (2年生)
 - 数値解析演習 (3年生)
 - アルゴリズム論演習 (3年生)

演習の資料はホームページを活用して、学生に配布している。

研究室に所属する学部4年生、修士、博士学生の研究に関するセミナーに参加し、共同研究、助言等を行う。
- ・ 担当授業科目
 1. 2013年度・前期, 情報論理学演習.
 2. 2013年度・前期, 数値解析演習.
 3. 2013年度・後期, プログラミング演習.

➔ 大学運営

- ・ 学内運営に関わる各種委員・役職等
 1. 2013.11～2013.12, 「ピックセンサーボックス 一式」の調達に伴う技術審査委員.
 2. 2013.11～2014.01, 「プチセンサーボックス 一式」の調達に伴う仕様策定委員.
 3. 2013.07～2013.10, 「ピックセンサーボックス 一式」の調達に伴う仕様策定委員.
 4. 2013.04～2014.03, 全学共通ICカード事業室長.
 5. 2013.03～2013.08, 「2D/3D教材開発システム 一式」の調達に伴う仕様策定委員.
 6. 2013.02～2014.03, 「プチセンサーボックス 一式」の調達に伴う技術審査委員.

研究成果

- (1) リフティングウェーブレットを拡張したリフティング複素ウェーブレットフィルタ理論の構築に関する研究を遂行し、画像の局所特徴量を抽出するアルゴリズムを開発した。既存のリフティングウェーブレットフィルタは、自由パラメータをもつ双直交ウェーブレットである。双直交ウェーブレットフィルタの分解アルゴリズムは入力信号・画像をダウンサンプリングするため、それらのシフト変化に影響を受ける問題がある。そこで、本研究では、リフティングウェーブレットフィルタを、実数部と虚数部をもつ複素ウェーブレットフィルタに拡張し、入力信号・画像のシフト・回転に不変な特徴を抽出するリフティング複素ウェーブレット変換 (LCWT) を提案し (図1左)、さらに、LCWTを画像に適用し、画像の特徴点であるキーポイントを検出するアルゴリズムを考案した (図1右)。提案手法では、ウェーブレット高速計算アルゴリズムにより効率よくキーポイントを検出することができる。

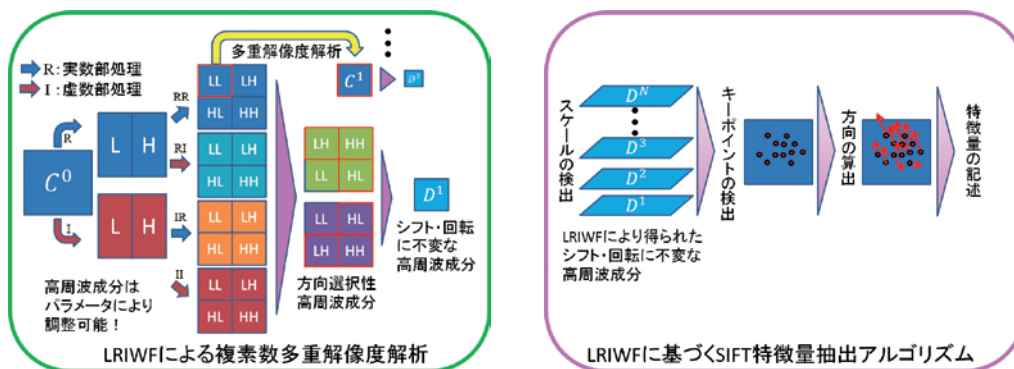


図1: リフティング複素ウェーブレット変換の概要と特徴抽出アルゴリズム

- (2) 信号・画像から特定の周波数特徴を抽出することのできるリフティング複素ウェーブレットフィルタの設計法を確立した。提案手法では、自由パラメータをもつリフティングウェーブレット変換の低周波フィルタの周波数特性に着目し、所望のバンドパス特性をもつようにそのパラメータを決定するアルゴリズムを構築した。本手法により設計された低周波フィルタを用いて、信号・画像からバンドパス成分を抽出するLCWTを実現できる。LCWTは、既存のウェーブレット変換やウェーブレットパケットでは抽出することのできないマルチレベル・スケールの局所特徴量を抽出することができ、音声信号の認識・識別、画像の物体認識へと応用することができる。画像の局所特徴を抽出するためには、画像のマルチスケール特徴からキーポイントとなる点を検出する必要がある。本研究では、LCWTの組を構成し、効率よくマルチスケール特徴を計算する。

(3) 環境適応的に物体を検出することのできるモバイルロボットの研究開発を行った。LCWTを利用する画像の局所特徴量を高速に抽出するアルゴリズムを開発し、類似画像検索システムに基づく物体検出システムをモバイルロボット上に実装した。提案するLCWTは自由パラメータをもつ複素ウェーブレットフィルタの組である。この自由パラメータをロボットが行動する環境に対して適応的に決定するアルゴリズムを考案した(図2)。具体的には、まずロボットが行動する環境空間において、実際にロボットが行動しつつ画像を収集し、それらを訓練画像とする。ここで初期パラメータをもつLCWTにより訓練画像集合からキーポイント群を抽出し、それらをクラスタリングすることによりVisual Wordの集合を得る。訓練画像集合におけるVisual Wordの使用頻度なるべく偏らないようにLCWTのパラメータを遺伝的アルゴリズムに基づいて更新し、Visual Wordの再抽出を繰り返す。実際には、Visual Wordの頻度分布のエントロピーが大きくなるように計算を実施した。この処理により、どの画像も持つようなVisual Wordが減り、物体の識別に有効な特徴ベクトルが抽出できるようになることを期待している。我々が開発したモバイルロボットを用いた実験において、最終的には世代数が100まで繰り返し、物体検出の精度が向上することを示した。

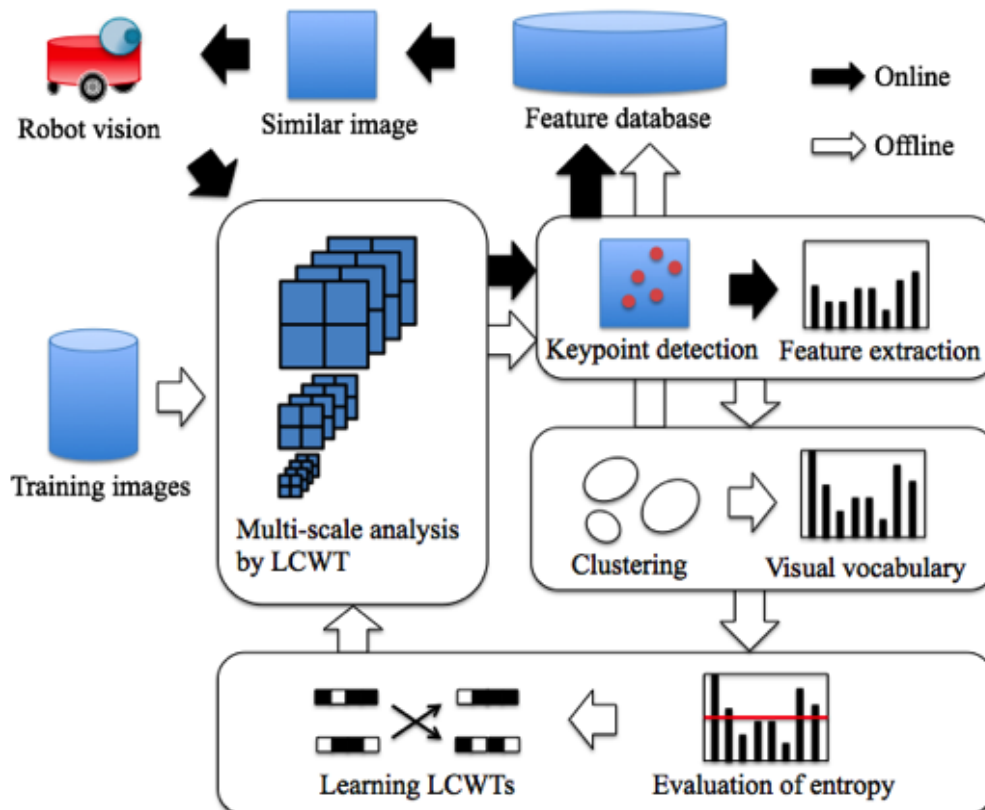


図2: LCWTを用いた類似画像検索の手法に基づくロボットビジョンの物体検出

麻生 典

(芸術工学研究院 助教)

→ 主な研究テーマ

- ・ 知的財産法

キーワード: 知的財産, 先使用权, 占有, デザイン, 国際的調和

→ 研究業績

- ・ 原著論文

1. 麻生典, フランスにおける知的財産と占有, 法学研究, 86, 6, 103-143, 2013.06.
2. ドイツにおける先使用权制度の主体的範囲, パテント, 66巻, 3号, 62-81, 2013.03.

→ 研究資金

- ・ 科学研究費補助金

1. 2013年度, 研究活動スタート支援, 代表, 著作権の時効—知的財産の占有概念を基礎として—.

- ・ 競争的資金 (受託研究を含む) の採択状況

1. 2013年度~2014年度, TEPIA知的財産研究助成, 代表, 特許権の共有制度のあり方—フランス法からの示唆—.

- ・ 共同研究、受託研究

1. 2013.09~2014.05, 受託研究, FromGlobal, 分担, Ebooksプロジェクト—電子書籍の未来を考える—.

→ 教育活動

- ・ 教育活動概要

学部では知的財産論、文化比較論、芸術情報プロジェクト演習等を担当し、学府ではコンテンツ知財論、修士論文研究等を担当しています。

- ・ 担当授業科目

1. 2013年度・前期, 芸術情報プロジェクト演習.
2. 2013年度・後期, 知的財産論.
3. 2013年度・後期, コンテンツ知財論.

研究内容

知的財産法を研究しています。現在までの主たるテーマは先使用権制度でしたが、現在は知的財産と占有に興味を持って研究しています。

また、デザイン保護法制の国際的調和の研究にも取り組んでいます。

大学運営

- ・ 大学運営に係る各種委員・役職等
 1. 2013.11～2015.03, 1号館改修WG.
 2. 2013.04～2014.03, パネルWG.
 3. 2013.04～2015.03, 安全衛生委員.

研究内容詳細

2013年度の主な研究内容は以下の通りである。

我が国の民法においては、その85条で「この法律において『物』とは、有体物をいう」と規定し「物」の対象に無体物は含まれていない。それゆえ、一般に我が国では知的財産という無対物に対して占有概念が議論されることはない。一方で、知的財産権について占有概念が民法上問題とされるのは、その205条「この章の規定は、自己のためにする意思をもって財産権の行使をする場合について準用する」という規定である。準占有が知的財産権について問題となった事例が最判平9年7月17日¹であり、最高裁は一般論として複製権の準占有に基づく取得時効の成立を肯定している。ここでは、複製権の取得時効が成立するためには「外形的に著作権者と同様に複製権を独占的、排他的に行使する状態が継続されていることを要」するとして、「財産権の行使」の要件（準占有の要件）が提示されている。

一方で、フランス民法典においては物から無体物は除外されておらず、さらには無体物が占有の対象となるという議論が近年熱を帯びて来ている²。ここでは無体物である知的財産／知的財産権にも占有概念の成立が観念され³、その占有の機能が知的財産／知的財産権のどの場面に現れているのかが検討されている。民法上の「物」概念が両国で異なるとしても、知的財産／知的財産権と占有に関するこのような基礎的な理論検討は、我が国においても参考に値するようと思われる。

¹ 民集51巻6号2714頁。

² 無体物への占有という議論の呼び水となり、無体物への占有概念を詳細に検討したのがペリシエのテーゼ (Anne PÉLISSIER, *Possession et meubles incorporels*, Dalloz, 2001) である。ここでは、無体物への占有を肯定するために、占有の定義を伝統的理解たる「物理的接触(contact physique)」を通じた支配ではなく、物理的接触から解放された「事実上の権限(pouvoir de fait)」と占有を定義して、論述が展開されている。事実上の権限たりうるには、その権限が第三者に認識されている必要がある (n° 219, p.100)。第三者 (社会) による承認は何らかの表徴 (signe) によって表現される必要があり (n° 228 et s., p.104 et s.)、その表徴を通じて事実上の権限は社会的認識を得ることになる (n° 230 et s., p.105.)。ペリシエの見解については、森田宏樹「有価証券のペーパーレス化の基礎理論」金融研究 (日本銀行金融研究所・2006年) 21頁以下、同「金銭および有価証券の無体化・電子化と『占有』概念」『法の再構築Ⅲ 科学技術の発展と法』(東京大学出版会・2007年) 213頁以下に詳しい。

ペリシエのテーゼは知的財産法の立場からも評価を受けているように思われるが (例えば、Christophe CARON, "Du droit des biens en tant que droit commun de la propriété intellectuelle", JCP G., 2004, I, 162, n° 4, p.1625, Michel VIVANT et Jean-Michel BRUGUIÈRE, *Droit d'auteur*, 2éd., Dalloz, 2013, n° 404, p.353, note 3. Nicolas BINCTIN, *Droit de la propriété intellectuelle*, 2éd., L.G.D.J., 2012, n° 9, p.29 et s., même auteur, "La possession des choses corporelles et incorporelles", *Le Patrimoine Au 21^e siècle*, Société de législation comparée, 2012, p.449 et s.もその見解を前提として

いると思われる。Yann BASIRE, Les fonctions de la marque : essai sur la cohérence du régime juridique d'un signe distinctif, 2011, thèse, l'Université de Strasbourg, p.53でも簡単に触れられる程度あるが、そのような見解が支持されているようである)、懐疑的な立場も多く見られる (Pierre-Yves GAUTIER, Propriété littéraire et artistique, 8éd., PUF, 2012, n° 264, p.292, note4.その急先鋒がFrédéric POLLAUD-DULIANである。例えば、F.POLLAUD-DULIAN, La propriété industrielle, Economica, n° 38, p.20 et s., même auteur, “La présomption prétorienne de titularité du droit d' auteur dans l' action en contrefaçon : la jurisprudence Aéro à l' épreuve du temps”, RTD com., 2011, p.49. また、ペリシエ論文に対するレビューも参照 (F.POLLAUD-DULIAN, revue de thèse, Propr Intell, Avril 2002, n° 3, p.132.)。古くは、F.POLLAUD-DULIAN, “De la prescription en droit d' auteur”, RTD com. 1999, p.585から無体物への占有には懐疑的であった)。

³ 占有の定義はフランス民法典2255条 (旧2228条) 参照。

部門紹介

Annual Report of
Innovation Center for
Educational Resource

2013



Educational Technology

エデュケーショナルテクノロジー部門

- ・ インストラクショナルデザインに基づいた教材、教育方法の開発・適用
- ・ 協調型・学生主導型学習の推進
- ・ 自律的な学習と実践力を育成する教育技術の普及と促進



Contents Design

コンテンツデザイン部門

- ・ 双方向型3次元マルチメディアやゲーム性を活用した携帯端末やデジタル放送等の新技術に対応する教材コンテンツの開発
- ・ 学習意欲を高めるコンテンツの作成技法や作成効率を高めるツールの提供



Open Educational Resources

オープンエデュケーショナルリソース部門

- ・ OCW、YouTube などを活用したオンデマンド学習の推進
- ・ 教育コンテンツを再利用するための著作権処理システム
- ・ SNS (Social Networking Service) の活用
- ・ 教材の公開を通じた学内外で知の公共化と学びの共同体の醸成

活動紹介

Annual Report of
Innovation Center for
Educational Resource

2013



講演会開催

実施日時：2013年7月23日（火）16:30～18:30

実施場所：情報基盤研究開発センター多目的講習室

内 容：「OCWとオープンエデュケーションに関する講演会」

講 演 者：宮川繁氏（マサチューセッツ工科大学教授）

参 加 者：62名

実施日時：2013年2月20日（木）15:00～17:00

実施場所：旧工学部本館2階4番講義室

内 容：「Web学習システム（学習管理システム）を利用した教育実践」

講 演 者：岡崎智己氏（留学生センター教授）

大賀哲氏（法学研究院准教授）

三木洋一郎氏（歯学研究院教授）

吉川由香里氏（大学病院看護部看護師）

井上仁氏（情報基盤研究開発センター准教授）

参 加 者：33名

※この講演会は、教育企画委員会主催／教材開発センター実施で、全学FD活動の一環として行われました。



イベント参加

参加日時: 2013年11月2日(土)

参加場所: 九州大学伊都キャンパス

内 容: Q-conference 2013ポスターセッション参加

参 加 者: テクニカルスタッフ1名(栢原幸恵)

参加日時: 2013年11月2日(土)

参加場所: 九州大学病院キャンパス

内 容: 「平成25年度 看護実践プロッサム開花プロジェクト報告会」eラーニングブース参加

参 加 者: 教員1名(高野茂)

テクニカルスタッフ2名(河野由起子、金子晃介)

参加日時: 2013年12月18日(水)～20日(金)

参加場所: 幕張メッセ国際会議場

内 容: 大学ICT推進協議会 2013年度年次大会にてブース出展

参 加 者: テクニカルスタッフ4名(栢原幸恵、河野由起子、金子晃介、中園沙貴)

参加日時: 2013年12月18日(水)～20日(金)

参加場所: 幕張メッセ国際会議場

内 容: 大学ICT推進協議会 2013年度年次大会にて出展者セミナー開催

参 加 者: テクニカルスタッフ1名(金子晃介)



学会等の参加

参加日時: 2013年5月22日 (水)

参加場所: 内田洋行株式会社東京協創広場CANVAS

内 容: 平成25年度JOCW総会

参 加 者: 教員1名 (井上仁)

参加日時: 2013年5月30日 (木)

参加場所: 学術総合センター

内 容: 大学ICT推進協議会総会

参 加 者: 教員1名 (岡田義広)

参加日時: 2013年6月8日 (土)

参加場所: 帝京大学 宇都宮キャンパス

内 容: 「Japan Blackboard User Group」第1回会合参加

参 加 者: テクニカルスタッフ1名 (田代 岳人)

参加日時: 2013年6月21日 (金)

参加場所: 大阪マーチャンドライズ・マート

内 容: New Education Expo

参 加 者: テクニカルスタッフ1名 (柘原幸恵)

参加日時: 2013年9月2日 (月)

参加場所: くにびきメッセ

内 容: IIAI AAI 2013

参 加 者: 教員1名 (岡田義広)

参加日時: 2013年9月2日 (月)

参加場所: 金沢大学 角間キャンパス

内 容: 第38回教育システム情報学会 全国大会

参 加 者: 教員1名 (吉田素文)



学会等の参加

参加日時: 2013年9月3日(火)～5日(木)

参加場所: 北海道大学学術交流会館

内 容: Cloud Week 2013

参 加 者: 教員1名(岡田義広)

参加日時: 2013年9月21日(土)～23日(月)

参加場所: 中国(大連) 大連大学創想賓館

内 容: 第五回「中・日・韓日本語文化研究国際フォーラム」

参 加 者: 教員1名(岡田義広)

参加日時: 2013年9月24日(火)

参加場所: 大阪大学中之島センター

内 容: 2013年度JOCW交流会

参 加 者: 教員1名(井上仁)

参加日時: 2013年10月12日(土)～13日(日)

参加場所: 東京大学 本郷キャンパス

内 容: 第61回日本図書館情報学会研究大会

参 加 者: 教員1名(吉田素文)

参加日時: 2013年10月29日(火)～31日(木)

参加場所: 群馬県前橋市 前橋テルサ

内 容: AMT-BHI2013

参 加 者: テクニカルスタッフ1名(金子晃介)

参加日時: 2013年11月22日(金)

参加場所: 東京都 SOFTIC会議室

内 容: 「デジタルコンテンツの権利処理」講習会

参 加 者: テクニカルスタッフ1名(河野由起子)



学会等の参加

参加日時: 2014年1月26日(日)

参加場所: 京都大学 芝蔭会館

内 容: 京都大学高等教育研究開発推進センター第87回公開研究会・国際シンポジウム

参 加 者: 教員1名(井上仁)

参加日時: 2014年2月7日(金)

参加場所: 東京都SOFTIC会議室

内 容: 「ネットワークと著作権」講習会

参 加 者: テクニカルスタッフ1名(河野由紀子)

参加日時: 2014年2月26日(水)～3月3日(月)

参加場所: マドリード(スペイン)

内 容: Mobile Learning 2014

参 加 者: テクニカルスタッフ1名(金子晃介)

学生1名(杉村涼)

参加日時: 2014年3月11日(火)～13日(木)

参加場所: 東京電気大学 東京千住キャンパス

内 容: 情報処理学会 第76回全国大会

参 加 者: 教員1名(井上仁)

参加日時: 2014年3月24日(月)～28日(金)

参加場所: インディアナポリス(アメリカ)

内 容: LAK2014

参 加 者: 教員1名(井上仁、山田政寛)

プロジェクト紹介

Annual Report of
Innovation Center for
Educational Resource

2013

P&P

(九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト)

平成24年度P&Pの「Cタイプ:教育研究システム改革プログラム支援」に、教材開発センターの研究課題「病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築」が採択されました。2年目の平成25年度は、学生との協働により、ゲーム性を取り入れた医学教材として、細菌学を対象とするシリアスゲームを開発しました。

研究組織

・代表者

吉田 素文 (医学研究院 教授・附属図書館副館長)

・分担者

岡田 義広 (附属図書館付設教材開発センター、感性融合デザインセンター・教授)

井上 仁 (情報基盤研究開発センター、附属図書館付設教材開発センター・准教授)

高野 茂 (システム情報科学研究院・助教)

研究概要

大学の使命の一つである優秀な人材の輩出において、ICT 技術を高度に活用した新しいタイプの教材開発と、その教材を公開し開かれた学習の場を提供することにより、学内外の自律的な学習者による協調的な学習の推進を図ることはきわめて重要です。このため、平成 23 年 4 月に附属図書館付設教材開発センターが設置されました。実際の授業で利用できる教育効果の高い教材を開発するためには、授業の実施主体である教員と学生の協力が不可欠です。本申請研究の目的は、医学教育分野を対象を絞り、教員と学生の協力のもと 3DCG (3 次元コンピュータグラフィックス) 等を活用した電子教材の開発と教育実践を通して、教材の開発体制の構築と教材の提供体制の構築を図り全学規模の教材開発に先立つ電子教材開発のモデルケースを確立することです。具体的には、1) 3D 教材の開発と教材開発体制の構築、2) 教材の提供体制の構築、3) 教材開発プロセスの確立、4) 教育効果の検証方法の確立をそれぞれ目指します。本申請研究の成果を他分野へ導入することにより、全学規模の教材開発を強力に推し進めることが可能となります。

平成 25 年度の取り組み

平成 25 年度は、ゲーム性を取り入れた医学教材の開発を実施しました。ゲーム性を取り入れることで、勉強しているという意識が薄くなり、ゲームを進めることで自然と学習対象に関する知識が身に付くようになります。同時に、教材の内容に興味を引かせ、自ら学びたいという意識を高めることができます。楽しみ以外の目的をもつゲームを一般にシリアスゲームとよび、今回開発した教材は、学習用シリアスゲームの一つです。

① 開発体制

本課題では、学生との協働による教材開発のモデルを構築することを目的の一つとしています。従来の教材開発では、講義を担当する教員が自らの考えで一方向的に作成し講義を実施していました。講義で使用された教材に関して学生の意見は全く取り入れられていません。学生の意見を取り入れることで、学習効果の高い教材を提供できると考えられます。そこで、学生との協働により教材開発を実施しました。4名の医学部学生と1名の理学部物理学科情報理学コース学生、システム情報科学府学生1名、また、デザイナーとして芸術工学府の学生1名の協力を得ました。

② 開発状況

定期的に学生との教材開発ミーティングを実施し、対象とする科目、ゲームの種類、実行環境、開発方法等について議論を重ねました。具体的な活動の一覧は教材開発センター・ホームページ（http://www.icer.kyushu-u.ac.jp/pandp_activity）にあります。議論した結果、細菌学を対象とするシリアスゲームの開発を実施しました。昨今の携帯端末の普及と学習者の利便性を考え、Android タブレット端末を実行環境としました。細菌に感染した患者の病状からその細菌を予測して、それに適した治療を施すことでポイントが得られ、ゴールを目指すという内容のロールプレイングタイプのゲームにしました。ゲーム名は、「サイキンハザード」です。

③ 結果

開発した細菌学ゲームのモニタリングを実施し、学習効果があることを確認しました。特に、モニタ学生からは“細菌学について興味がわいた”、“細菌学をさらに学びたい”というポジティブな意見が得られ、学習意欲を高める効果があることが分かりました。

主な発表論文等

雑誌論文

1. Ryo Sugimura, et. al. : MOBILE GAME FOR LEARNING BACTERIOLOGY, IADIS 10th Int. Conf. on Mobile Learning 2014, pp.285-289, February 28-March 2, 2014.
2. Yoshihiro Okada: Web Version of IntelligentBox (WebIB) and Its Integration with Webble World, Webble Technology as Proc. of First Webble World Summit (WWS 2013), CCIS series 372, (ISSN 1865-0929, ISBN 978-3-642-38835-4), pp. 11-20, June 3-5, 2013.
3. Yuuta Kosuki and Yoshihiro Okada: 3D Visual Component Based Development System for Medical Training Systems Supporting Haptic Devices and Their Collaborative Environments, Proc. of the 4th Int. Workshop on Virtual Environment and Network Oriented Applications (VENOA-2012) of CISIS-2012, IEEE CS Press, pp. 687-692, July, 4-6, 2012.

学会発表

1. 河津宗太郎ほか：学生主導型電子教材開発：細菌学の知識と学習意欲を獲得するためのシリアスゲームアプリ，第46回日本医学教育学会大会，7月18-19日，2014.

※ Android 用アプリ「サイキンハザード」は、以下の URL からダウンロードできます。

http://www.icer.kyushu-u.ac.jp/pandp_app_saikin



図1. 教材開発ミーティングの様子(左)と「サイキンハザード」の画面例(右)

講習会

Annual Report of
Innovation Center for
Educational Resource

2013



電子教材開発者向け講習会

2013年

- 4月3日(水) 17:30~19:00 病院地区(総合研究棟講義室1階104号室)
- 4月5日(金) 10:30~12:00 大橋地区(情報基盤センター大橋分室2階第1実習室)
- 4月5日(金) 15:00~16:30 箱崎地区(中央図書館3階第2情報サロン)
- 6月27日(木) 16:30~18:00 伊都地区(センター1号館6階1601号室)

電子教材開発者向け講習会—WebGLを用いた3Dコンテンツ開発—

2013年

- 9月24日(火) 13:00~14:30 箱崎地区(中央図書館第2情報サロン)
- 9月25日(水) 13:00~14:30 伊都地区(伊都図書館2階情報サロン)
- 9月27日(金) 14:00~15:30 病院地区(総合研究棟1階101講義室)
- 12月26日(木) 13:30~15:00 箱崎地区(中央図書館3階第2情報サロン) **FD**
- 12月27日(金) 13:30~15:00 病院地区(総合研究棟1階101講義室) **FD**

2014年

- 3月28日(金) 13:30~15:00 病院地区(総合研究棟1階101講義室) **FD**

電子教材開発者向け講習会—iBooks Authorを用いた電子教材開発—

2013年

- 9月24日(火) 15:30~17:00 箱崎地区(中央図書館第2情報サロン)
- 9月25日(水) 15:30~17:00 伊都地区(伊都図書館2階情報サロン)
- 9月27日(金) 16:30~18:00 病院地区(総合研究棟1階101講義室)
- 12月25日(水) 15:30~17:00 伊都地区(伊都図書館2階情報サロン) **FD**
- 12月26日(木) 15:30~17:00 箱崎地区(中央図書館3階第2情報サロン) **FD**
- 12月27日(金) 15:30~17:00 病院地区(総合研究棟1階101講義室) **FD**

2014年

- 3月28日(金) 15:30~17:00 病院地区(総合研究棟1階101講義室) **FD**





Handbook講習会

2013年

- 4月 1日(月) 13:00~14:30 箱崎地区(中央図書館第2情報サロン)
4月 1日(月) 17:30~19:00 病院地区(医学図書館2F情報サロン)
4月 2日(火) 9:00~10:30 大橋地区(情報基盤センター大橋分室 実習室1)
4月 2日(火) 14:00~15:30 伊都地区(伊都図書館2F情報サロン)
4月 4日(木) 10:30~12:00 筑紫地区(C-CUBE 2F eラーニング室)
9月25日(水) 13:00~14:30 箱崎地区(情報基盤研究開発センター2F 講義室)
9月25日(水) 17:00~18:30 馬出地区(医学図書館 情報サロン)
9月26日(木) 10:30~12:00 伊都地区(センター1号館 1601)
9月27日(金) 10:00~11:30 大橋地区(情報基盤研究開発センター大橋分室 実習室1)

2014年

- 3月19日(水) 14:30~16:00 箱崎地区(情報基盤研究開発センター2F 講義室) **FD**
3月19日(水) 17:00~18:30 馬出地区(医学図書館2F 情報サロン) **FD**
3月20日(木) 10:30~12:00 大橋地区(情報基盤研究開発センター大橋分室 実習室1) **FD**
3月20日(木) 14:00~15:30 伊都地区(伊都図書館 2F 情報サロン) **FD**
3月31日(月) 10:30~12:00 筑紫地区(C-CUBE e-learning室) **FD**

Web学習システム講習会—基礎—

2013年

- 4月 1日(月) 14:30~16:00 箱崎地区(中央図書館第2情報サロン)
4月 2日(火) 10:30~12:00 大橋地区(情報基盤センター大橋分室 実習室1)
4月 2日(火) 15:30~17:00 伊都地区(伊都図書館2F情報サロン)
4月 4日(木) 13:00~14:30 筑紫地区(C-CUBE 2F eラーニング室)
4月 5日(金) 13:00~14:30 伊都地区(伊都図書館2F情報サロン)
4月 5日(金) 17:30~19:00 病院地区(医学図書館2F情報サロン)

Web学習システム講習会—応用1—

2013年

- 4月15日(月) 17:30~19:00 箱崎地区(中央図書館第2情報サロン)
4月16日(火) 17:30~19:00 大橋地区(情報基盤センター大橋分室 実習室1)
4月17日(水) 17:30~19:00 病院地区(総合研究棟2F ITルーム)

Web学習システム講習会—応用2—

2013年

- 4月22日(月) 17:30~19:00 病院地区(総合研究棟2F ITルーム)
4月24日(水) 17:30~19:00 伊都地区(伊都図書館2F情報サロン)
4月26日(金) 17:30~19:00 筑紫地区(C-CUBE 2F eラーニング室)



Web学習システム講習会

2013年

- 9月17日(火) 13:30~15:00 箱崎地区(情報基盤研究開発センター2F 講義室)
- 9月17日(火) 17:00~18:30 馬出地区(医学図書館 情報サロン)
- 9月18日(水) 13:30~15:00 伊都地区(センター1号館 1601)
- 9月19日(木) 13:00~14:30 大橋地区(情報基盤研究開発センター大橋分室 実習室1)
- 9月19日(木) 16:30~18:00 筑紫地区(C-CUBE e-learning室)

2014年

- 3月17日(月) 10:30~12:00 箱崎地区(情報基盤研究開発センター2F 講義室) **FD**
- 3月17日(月) 17:00~18:30 馬出地区(医学図書館 2F情報サロン) **FD**
- 3月18日(火) 13:30~15:00 大橋地区(情報基盤研究開発センター大橋分室 実習室1) **FD**
- 3月19日(水) 10:30~12:00 伊都地区(伊都図書館 2F 情報サロン) **FD**

Web学習システム講習会—英語—

2013年

- 9月26日(木) 15:30~17:00 伊都地区(センター1号館 1408)





電子教材 著作権講習会

2013年

5月15日(水)	10:30~12:00	箱崎	中央図書館 第2情報サロン
6月10日(月)	17:00~18:30	馬出	総合研究棟2階 201号室
7月8日(月)	10:30~12:00	伊都	伊都図書館2F 情報サロン
8月19日(月)	10:30~12:00	筑紫	総合研究棟(C-CUBE)2階 eラーニング室
9月9日(月)	10:30~12:00	大橋	情報基盤センター大橋分室2階 第3実習室
10月10日(木)	10:30~12:00	箱崎	中央図書館 第2情報サロン
11月14日(木)	17:00~18:30	馬出	総合研究棟2階 201セミナー室
12月16日(月)	10:30~12:00	伊都	伊都図書館2F 情報サロン FD

2014年

1月16日(木)	10:30~12:00	筑紫	総合研究棟(C-CUBE)2階 eラーニング室 FD
----------	-------------	----	-----------------------------------



FD = 教育企画委員会主催／教材開発センター実施で、全学FD活動の一環として行われました。

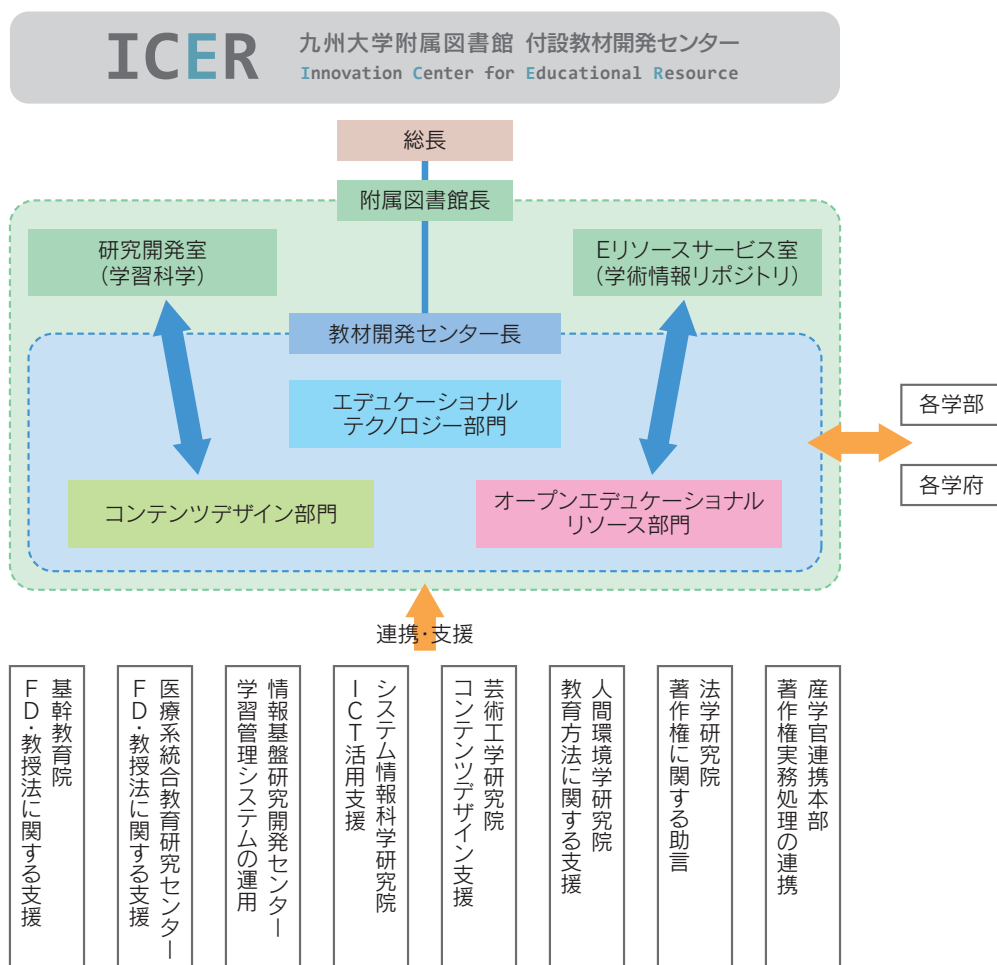
資料

Annual Report of
Innovation Center for
Educational Resource

2013

教材開発センター組織

▶ 組織図



教材開発センター運営委員

2013年4月

区分	所属・職	氏名
委員長	教材開発センター長	藤村 直美
委員	附属図書館長	川本 芳昭
〃	教材開発センター教授	岡田 義広
〃	医学研究院教授 (協力教員)	吉田 素文
〃	情報基盤研究開発センター准教授 (協力教員)	井上 仁
〃	学務部長	江島 定人
〃	附属図書館・事務部長	益森 治巳

撮影実績

公開コンテンツリスト

2014年3月

イベント	タイトル	講師	YouTube	iTunes U	OCW
講義(前期)	情報処理演習V	藤村直美 教授	○	○	
	情報システム論	井上仁 准教授	○	○	○
	G30 Basic of Information Processing	岡田義広 教授	○	○	
	課題協学:「繋がり」	古屋謙治 教授	●		
	ネットワークサービス特論	藤村直美 教授	○	○	
	少人数セミナー	田中岳 准教授	●		
講義(後期)	ネットワークサービスデザイン	藤村直美 教授	○	○	
	環境とエネルギー安全保障政策	堀尾容康 教授	○		
	形式言語とオートマトン	櫻井幸一 教授	●		
	「課題協学: 安心な地球環境を求めて」	古屋謙治 教授	●		
	決断科学セミナー	矢原徹一 教授	●		
	電子資料開発論	井上仁 准教授	○	○	
	少人数セミナー	田中岳 准教授	●		
集中講義	Debate (US-Japan exchange)	井上奈良彦 教授	○		
	Debate (international friendship)	井上奈良彦 教授	○		
	英語政策ディベート集中講義	井上奈良彦 教授	○		
	バイオエネルギーの将来:他の 再生可能エネルギーと比較して	鈴木徹 准教授 ほか	●		
	農業生物資源学特論第五	三中信宏 先生 (独立行政法人 農業環境技術 研究所)	○		

イベント	タイトル	講師	YouTube	iTunes U	OCW
I2CNER seminar series (年間計15本)			○	○	
第54回附属図書館貴重文物展示 講演会		片野博 九州大学 名誉教授	○		
オープンキャンパス	ライブラリーサイエンス 専攻修士課程	渡邊由紀子准教授 井上仁 准教授	○	○	○
	文学部「中国哲学史」	柴田篤 教授	○		
	「高校生のための文学部講義」	高野和良 准教授	○	○	
感性工学会		田北雅裕 講師	●		
21世紀プログラム・ビブリオバトル			○		
教材開発センター講演会	OCWと オープンエデュケーション	宮川繁 教授	○	○	
留学体験プレゼン		学生	○		
「寒剤発注・管理システム」の取り扱い説明会			○		
科研費説明会			●		
課題協学科目実践FD		古屋謙治 教授	●		
理学府 EEP講演		Prof. James M. Lisy Dr. Pieter Visser Namiko Mitarai Walter Reisner	●		
ビブリオバトル九大予選会(箱崎)			○	○	
JDA九州ディベート大会		井上奈良彦 教授	○		
Web学習システム(学習管理システム)を利用した教育実践		岡崎智己 教授 大賀哲 准教授 三木洋一郎 教授 吉川由香里 看護師 井上仁 准教授	○		

●限定公開

▶九州大学附属図書館付設教材開発センターだより「ICER Newsletter」

No.2 (2013.4) , No.3 (2013.6) , No.4 (2013.8) , No.5 (2013.10) No.6 (2013.12) , No.7 (2014.2)



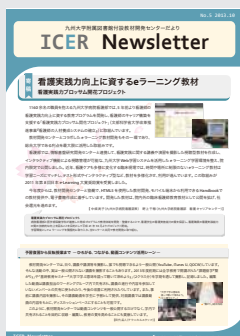
No.2



No.3



No.4



No.5



No.6



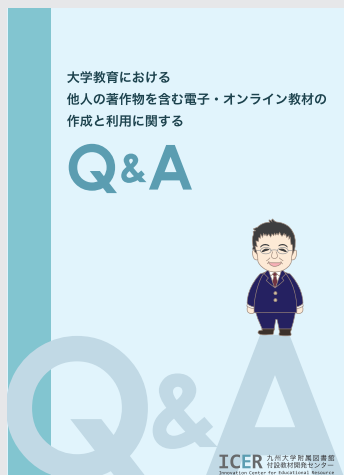
No.7

<http://icer.kyushu-u.ac.jp/pr>

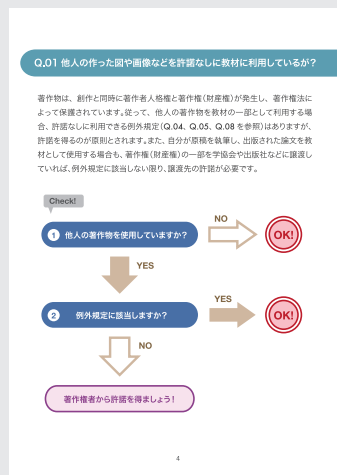
▶Q&Aハンドブック

「大学教育における他人の著作物を含む電子・オンライン教材の作成と利用に関するQ&A」

第2版



<http://hdl.handle.net/2324/1440766>



Annual Report of Innovation Center for Educational Resource

2013

ICER 九州大学附属図書館
付設教材開発センター
Innovation Center for Educational Resource

編集発行 九州大学附属図書館付設教材開発センター

住 所 : 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 TEL : 092-642-3983 E-mail : info@icer.kyushu-u.ac.jp
URL : <http://www.icer.kyushu-u.ac.jp>